

東日本大震災から2年

～みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。～

震災直後、何か私にできることはないかと考え、アスリートのネットワークで募金をし、寄付させていただきました。その時のアスリート達は皆私と同様に、自分達に何かできることはないかと逸る気持ちで迅速に行動しました。暫くして復旧が進んでいき、時間は流れていきました。そんな中、被災地に対してほとんど何もできていない私は、忸怩たる思いで過ごしていました。

あまりにも大きな被害を受けた子供たちに何と言葉をかければいいのか、どんな態度で接したらいいのか自信もありませんでした。こんな大変なときに私が行って喜んでくれるのだろうか。一方で、私が一緒に子供たちと走ることで、少しでも楽しんで元気になってもらいたいと強く思いました。このように、震災後に初めて福島を訪れるまでに、自分の中で葛藤していました。いざ訪れてみると、そんな私の心配はよそに子供たちは元気な笑顔で私を迎えてくれて、一緒に楽しんでくれました。ところが、訪れたのは真夏にもかかわらず、日焼けしていない白い肌や少し走るとすぐに息があがる姿を見て、やはり現実はまだまだ厳しく、復興への道は果てしなく遠いのだと痛感しました。それから何度か被災地に足を運びましたが、こちらが気をもむよりも、私自身が元気な姿で一緒になって活動することが大切なのだと思うと気持ちが軽くなりました。

昨年の神戸マラソンでのスタートセレモニーにおいて岩手県立高田高校音楽部と神戸の高校合唱部・コーラス部による合同合唱が行われました。同じ被災者として思いが通じ合った合唱には心を打たれました。その生徒たちは以前から交流しており、セレモニー後も別れを惜しみ涙する生徒たちもいました。

この震災や被災地を訪れたことを通じて、普段の生活に追われて忘れがちな人との絆や大切な人への思い、人への感謝、思いやりなど大切なことを再認識することができました。私たちスポーツ選手にできることも再認識できました。震災復興の長い道のりの中で、私が役に立てることがあればこれからも継続してやっていきたいと思えます。

朝原宣治